



# 野田正明

## 「私の10点」

1977年にニューヨークにアトリエ構え、以来、40数年間ニューヨークを拠点として活動する希少な日本人アーティスト・野田正明。アメリカ、ギリシャ、中国、日本などでの多くのモニュメント制作や美術館での個展を行う国際作家として活躍している。ペインティング、ドローイング、水彩、版画、そして彫刻と幅広い空間表現を見せてきたアーティストの軌跡は、[私の10点]に集約するのは難しいが、そのエッセンスが作家自身によって選ばれた。

# 野田正明

Masaaki NODA

1949年広島県福山市生まれ 1972年大阪芸術大学美術学課卒業、在学中に信濃橋画廊で初個展（大阪） 1976年モダンアート展、大阪市長賞受賞 新鋭作家展「アートナウ（兵庫県立美術館） 1977年渡米、ニューヨーク・ソーホーに居を構え現在に至る アート・スチューデント・リーグで奨学金を受け81年まで在籍 1979年第31回ボストン全米版画協会・買上賞（マサチューセッツ） 1982年永住権取得 アメリカ・オランダ友好100周年記念「国際空中彫刻展」（セントラルパーク、NY） アメリカ初個展を3画廊で開催（キューギャラリー・NY、ACWLPギャラリー・NY、ミリアム・パールマンギャラリー・シカゴ） 1984年クラコウ国際版画ビエンナーレ（ポーランド、86、88、94、97、00、03年出品） 1985年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ（ユーゴスラビア、87、89、91年出品） 中華民国国際版画ビエンナーレ（中国、89、95、01、04年出品） 1997年 大型ステンドグラス「飛翔 天空昇、去来流転」（京阪電鉄 宇治駅舎） 2000年モニュメント彫刻「飛翔II 時空を超えて」（福山市） 2003年「超越境界1973-2003」（深圳美術館・中国） 同時に美術館正面にモニュメント「飛翔V 天空昇」 2005年個展（デルフィ・ヨーロッパ文化センター・ギリシャ） 彫刻公園に「アポロの鏡」設置 2006年野田正明個展・ニューヨークからのメッセージ（ふくやま美術館） 2009年モニュメント「創生」設置（ふくやま美術館） モニュメント「ラフカディオ・ハーンの開かれた精神」設置（ギリシャ・アメリカン大学、アテネ） 同時に個展開催 2010年モニュメント「ヘルメスの精神」設置（マラソン市・ギリシャ） 2011年「疾風・フラッシュバック」設置（広島市現代美術館） 2013年ニューヨーク・アート・スチューデント・リーグ創設137年の記念本「Time Line」に歴代代表作家の一人として掲載される 2015年壁面彫刻「光彩」設置、同会場で「ニューヨークで活躍する日系作家展」に出席（ニューヨーク日系人会） 2016年野田正明の世界・ニューヨークから世界へ（ふくやま美術館） 2017年春の叙勲・紺綬褒章受章、広島文化賞受賞、アメリカ版画作家協会名誉会員、荣誉賞受賞 2018年個展「螺旋の交合1995-2018」（ギリシャ総領事館・NY） ステンレス彫刻「上昇」総領事館内に設置 2019年「新宿・レフカダ友好提携30周年記念」モニュメント「無限の未来—小泉八雲終焉の地」設置（新宿区小泉八雲記念公園） 2020年モニュメント「無限の未来」設置（在大阪ロシア連邦総領事館） 2020年モニュメント「栄光」設置（福山市総合体育館） 2021年個展（高梁市成羽美術館、岡山） 予定 現在 オーデュボン・アーティスト協会、ディレクター（版画部門） ニューヨーク／アリード・アメリカン・アーティスト協会、ディレクター（平面部門） ニューヨーク／アメリカン・グラフィック・アーティスト協会、委員、ニューヨーク



## Expression-110

シルクスクリーン 240 × 480cm 1976年



## Expression-80

シルクスクリーン 52 × 52cm 1977年

1970年代は、ヨーロッパ諸国のコンペで日本人が相次いで受賞する版画全盛の時代だった。大阪芸術大学在学中からでペインティングによる個展で作品を発表していた野田正明も、卒業後は、シルクスクリーンの明快さと完成度の高さ、切れ味に傾倒し、大作版画を発表した。この作品「Expression-110」は関西作家の登竜門として行われていた新鋭作家展「アートナウ」に選抜された。

また渡米前の作品「Expression-80」には、すでに立体指向が表れている作品が制作されている。



**静穏の後に After Serenity** シルクスクリーン 50 × 70cm 2003年



**静穏の前に Before Serenity**  
シルクスクリーン 50 × 70cm 2003年

ドローイング、シルクスクリーンから彫刻へと表現の幅を広げた野田正明だが、逆に、彫刻から版画に進化した作品もある。

「ペインティング、版画、ドローイング、水彩、彫刻は同時進行です。日本で、版画家は版画など、メディアによる縛りが大勢を占めますが、時代に翻弄され続ける、激動のアメリカにあって、作家としてのサバイブが必須であることを考えれば、メディアを超えた、表現全体の可能性を追求しながら、枯渇せず、作家として生涯を全うすることが最も重要なことだと考えます。ナム・ジュン・パイク、ジェームス・タレル、ジェフ・クーンズ、荒川修作などから、多くの示唆を受けました」



**From Beyond 彼方より**

シルクスクリーン 57 × 76cm 1986年

1977年に渡米しニューヨークのソーホーに居を構えた野田正明は、ニューヨークを中心にシカゴ、ボストン、フィラデルフィア、ワシントンDC、テキサス、ニュージャージーなど各地で毎年個展を行った。作品も日本での幾何学的な内容から、流動的な形態で淡い色彩の表現へと変わり、後の彫刻作品を想わせる展開になっている。





上段の作品は「天空昇」、下の作品は「去来流転」



## 飛翔—天空昇

スタンドグラス 235 × 630cm 1997年

京都府の宇治駅の新しい駅舎のために、京阪電鉄の依頼を受け、宇治平等院の「楽を奏でる、飛天の像」をモデルとした作品を制作した。作品は「飛翔—天空昇」と「去来流転」(200 × 505cm)の2点が設置された。制作に先駆け、メトロポリタン美術館でティファニーのスタンドグラスを研究した。この作品は建築家との初のコラボレーションによる公共プロジェクトとして、野田に新しいスタンドグラスでの表現を導いた。



## 事前に Before the Fact

ドローイング 木炭 紙 180 × 270cm 1985年

1983年から、3次元、自由表現のダイナミズムを求めて、フリーハンドによる大作ドローイングの制作を行っている。技法に囚われない、自由表現は版画にも影響を与え、版画そのものも絵画的な世界になっていったという。こうして、ニューヨーク、シカゴ、ボストン、テキサスの画廊で版画と大作ドローイングの発表を続けていった。



## Reflection and Conjugation

### 反響と結合

ミックスメディア、キャンバス 100 × 220cm 1994年  
ギリシャ・アメリカン大学収蔵



**アポロの鏡 Apollo's Mirror** 彫刻 ステンレス h 380cm 2005年

ギリシャのアポロ神殿に隣接する国立の文化機関、デルフィ・ヨーロッパ文化センターでアジア人初の個展を行った野田は、同センターの彫刻公園に「アポロの鏡」を設置した。600m 眼下には地中海。自己完結型のギリシャにはこれまでフランス、イタリア、アメリカなどの他国作家の彫刻はなく、海外作家の唯一の彫刻として設置された。



**飛翔-VI 天空昇**  
**Perpetual Flight-VI Rising to the Firmament**

彫刻 ステンレス 赤御影石 h 340cm 2003年 深圳美術館

中国・深圳美術館の企画でアメリカ作家のグループ展の予定が、学芸員が野田のニューヨークのスタジオで作品を見て、急遽個展「超越境界 1973 - 2003」開催となった。美術館正面中央に設置されたこの作品は、日中平和友好条約締結 25 周年記念のモニュメントとして恒久設置となった。





## ヘルメスの精神 The Spirit of Hermes

彫刻 ステンレス 白大理石 h500cm 2010年

ギリシャ、マラソン市長の依頼を受け、マラソン発祥の地、マラソンスタジアムに「マラソンの戦い 2500周年記念」のモニュメントとして彫刻「ヘルメスの精神」を設置した。この作品はアテネ・マラソンのスタート地点の象徴となっている。



## ラフカディオ・ハーンの開かれた精神

### The Open Mind of Lascadio Hearn

彫刻 ステンレス 黒御影石 h400cm 2009年  
ギリシャ・アメリカン大学（アテネ）に設置

明治の文豪、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、ギリシャ生まれ）をテーマにした一連の作品のスタートとして彫刻「ラフカディオ・ハーンの開かれた精神」が、日本ギリシャ友好110周年記念のモニュメントとしてギリシャ・アメリカン大学の入り口に設置された。続いて翌年2010年に八雲の妻・節とのゆかりの松江市に姉妹彫刻を、2014年には八雲の生地レフカダの文化センターに彫刻「ラフカディオ・ハーンと開かれた精神のオデュッセイア」を設置。そして2019年には新宿小泉八雲記念公園に彫刻「無限の未来—小泉八雲終焉の地」（新宿・レフカダ友好提携30周年記念）を設置した。10年間に亘り、八雲ゆかりの地4ヶ所を巡った、プロジェクトを行った。



(写真左から)

松江宍道湖畔「ラフカディオ・ハーンの開かれた精神」2010 h270cm

レフカス文化センター（ギリシャ）「ラフカディオ・ハーンと開かれた精神のオデュッセイア」2014 h220cm

新宿小泉八雲記念公園 「無限の未来—小泉八雲終焉の地」 2019 h280cm



## 栄光 Glory

彫刻 ステンレス 黒御影石 h570cm 2020年  
福山市総合体育館に設置

広島県福山市の福山市体育協会創立100周年記念のモニュメントとして、野田正明の福山市で13作品目となる野外彫刻として「栄光」が福山市総合体育館入口に設置された。すでに設置されている福山駅前の「いまこそ未来」と直線で繋がる位置にある。



## 上昇 Ascension

彫刻 ステンレス h 180cm 2018年  
ニューヨーク・ギリシャ総領事館

ギリシャでの長年の文化交流活動が評価されての個展「螺旋の交合 1995 - 2018 野田正明展」が開催された。同展では23年間描き溜めた未発表の水彩ペインティングや、ギリシャ4都市（デルフィ、アテネ、レフカダ、マラソン）に設置されたモニュメントモデルも展示された。この展覧会を記念して彫刻「上昇」が、ギリシャ総領事館コレクションとなり、大使館内入り口に設置された。



## 螺旋の交合-III Spiral Interaction- III

アクリル・キャンバス 72×56cm 2018



# 野田正明 Interview

コロナウィルスの感染が始まった中、空席の目立つ航空機に乗って、野田正明はニューヨークから日本に帰国した。公益財団法人福山市体育協会創立100周年の記念事業として設置されるモニュメント「栄光」(17頁参照)の除幕式が3月1日に行われたが、その準備や式典への参加のためだった。

ニューヨークに居を構えて43年、ここでアーティストとして生きることを選んだ野田は、ニューヨークを拠点に世界各地

を飛び回り作品を残している。「これは意識の問題ですが、ニューヨークにいて外国に行くのは楽なんです。日本から外国に行く時はヨイシヨイという感じあるんじゃないですかね。ニューヨークのような人種の坩堝、多民族社会の中にいて、いろんなものに触れていると、雰囲気楽なんです。だから行くことと思っただらどこでも行くし、行くことと思っただら仲間はニューヨークに必ずいるわけです。そういう人たちとの交流の中で、世界の情報もわかる。話も現実的に聞いているので興味も湧いてくる。その違いはものすごく大きい。ニューヨークに人が集中しているということは、逆にそこから外に向かつて行けるということですね」

中国、ギリシャなどで多くのモニュメントを残している野田は、こうした直接のコミュニケーション、身体を伴った行動力が大きく貢献しているという。

「ある時、ナム・ジュン・パイクに「ヘアライブ・コンチネンタル



ギリシャ総領事、コンスタンティン・クートラスと。

ルで生き残れ」と言われたんですよ。世界で生き残れということですね。時代によって国のアップダウンはありますが、国に拘らず、作家として生き残ればいいと教えてくれたんですね。これは素晴らしい答えだと思って、正に僕が実行しているのはそういうことで、最後まで作家を全うできる状況にいたいというのがまず第一ですね」

この積極的な姿勢は、野田正明がニューヨークで生きること

を選んだ結果、多くの国際的なアーティスト達との交流など、ニューヨークという環境の中で会得していったものだろう。しかし、世界各国から多くのアーティストがニューヨークを目指して集まり、挫折して撤退することが多い中で、どのように野田は40年以上生き続けているのだろうか。

「御多分に漏れず日本から貯金も持って行きましたが、作家志望で行っているから半年経って



ナム・ジュン・パイク、シゲコ・クボタファンデーションのスタッフと、打ち合わせ (野田のニューヨークのスタジオ)

アルバイトするわけですよ。当時は1週間働いて、1、2週間は食べる時代でしたから、みんなそうしている。だけど絵を描くというものはそういう片手間でできるものじゃない。世界の連中がしのぎを削っている場所で、レストランオーナーやガイドになっっている人を見てきて、これは駄目だと。それで摺師のアルバイトだけ残して、全部やめたんです。どこにも行かずじかに家で

版画を創ってコンペに出し続けた」

その結果、多くの画廊での展覧会が実現し、作家としてのだけの生活が実現した。ただしそこまで行くのは簡単なことではない。

「みんな一番勘違いしてはいけないのは、ここ何十年間もアメリカの根本はアカデミズムなんです。基本的に抽象なんてほとんどない、驚くでしょう。具象も具象、バリバリの具象なんです。昔の伝統的な絵画もあるし、それをさらにブレンドしたものもある。多くの美術団体があって、大学の教授から作家など膨大な人がいて、100年続いているところもある。そこに日本人はほとんどいません。そういう中に連続と基礎を置きながら、そこからアメリカの動向が出てきている。ブロードウェイもそうですよね。下地の厚い凄所から出てきている。難しいのは、日本の価値観を持ちこんでも駄目なんです。アメリカに住んで、アメリカの国の時間で過ごして、

世界を覗いてやらない限り本場のステージは踏めない。最初はコンペでどんどん落ちました。日本の現代アートをやっているその気で行ったけど駄目だった。その現実を踏まえて、この人種の坩堝の中で、自分の世界をやっているのは何かと考えました。それは多分、国際性だと思っただんです。アメリカで一番聞かれるのは「お前は何者だ」、「お前は何か」と常にそこなんです。もちろん日本はどういう国だとか、神道イズム、ブツイズムはどうだとか、侍はとか、歴史的なことは聞かれるけど、それは世界中の人がそれぞれ持っているものであってベースには違いないけど、そこに拘って仕事をして通用する世界ではない。やはり、僕らは現代作家だから、現代アートの中で表現する何かを導き出していかない限り通用しない。アートは何だ、版画は、日本人はなんだと、もっとも根源的なことを考えさせられたのがアメリカでしたね」

現在、アメリカの3つの美術



Allied Artists of America 委員たちのミーティングの集合写真

団体のディレクター、審査員を務めている野田正明は「アメリカは実力主義で人種的偏見を感じたことはないですね。美術団体とは言っても基本的に個人主義で、しがらみも 何もなければ開けっぴるげで、みんな良い人ですね」というほど、アメリカの社会に溶け込んでいる。